異世界転生！？どこの世界だよ・・・

クッペ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

出かけに電車を待っていたら、知らない子供がぶつかってきてホームに落ちてそのまま電車にはねられたと思った

目が覚めたらそこはみたこともない空間が広がっていた

このすばの世界にＦＥの武器を持ったオリ主を突っ込んでみました

目次

プロローグ ―― 1
一話 ―― 5
二話 ―― 9
三話 ―― 15
四話 ―― 19
五話 ―― 23

プロローグ

目が覚めると目の前に青い髪の美人が座っていた。
何を言ってるか分からない？大丈夫、俺もわからないから・・・それがすでに問題なんだけどな。
「相馬政宗さん、残念ながらあなたは先ほどあちらの世界で命を落としました。」
「・・・・・・」
おっと、自己紹介がまだだったな。俺の名前は相馬政宗、つい先ほど死んだらしい。
「・・・動揺しないのね？そんなに整理がつかないの？それとも心でも無くしちゃった？」
「いえ、さすがにあれは死んだと思いましたし。まぁなんで俺がここにいるのかは皆目見当もつきませんが・・・ええっと、あなたは？」
「私はアクア、水の女神アクアよ。アクシズ教団の御神体女神アクア様よ！」
「はぁ・・・？女神？アクシズ教団？あの、それって一体・・・？」
「その話はあとでゆっくりと。ねえ、あなたゲームとか好きよね？今とある世界では、魔王によって世界の滅亡の危機に脅かされているの。そこであなたみたいな若い日本人にその世界に行ってもらって、魔王を倒してきてほしいのよ。」
「いやまぁゲームは確かに好きでしたけれども・・・あの、ここは一体どこなんでしょうか？」
「ここは死後の世界。若くして死んだ人をとある場所に導くための所なのよ。あなたにはとある三つの選択肢が与えられているの。一つ目は赤ん坊としてやり直す、二つ目は天国に行ってのんびり暮らす、三つめは異世界に転生して冒険者となって、そこで魔王討伐に精を出す。さぁ、どれを選ぶ？言っておくけど天国なんて何にもないのよ？肉体もないんだからエッチなことなんてもちろんできないし、一日中日向ぼっこでもして暮らすしかないの。それに魔王を討伐すればどんな願いでもかなえられる特典までもらえるのよ？これはもう魔王

討伐をするしかないんじゃないかしら？」
　その説明を一番最初にするべきだろうと突っ込みたいところなのだが、今はそんなことよりも今後のことを考える。
　魔王討伐、どこのライトノベル展開だよとか思いつつも今までに自分以外の転生者が行ってるであろうことは想像に難くない。それでもなお討伐できていないのだから、俺がいまさら言ったところで何も変わらないんじゃないんだろうか？
　自分でいうのもあれなのだが、運動神経はそこまでよくない。精々平均程度。体力に至っては絶望的だ。魔王討伐ということは、戦闘して強くならなければならないのだろう。今まで平和な日本というところで暮らしてきた身としては、いきなり異世界行って魔王倒してこいと言われても不可能である。
　ただ先ほどの説明を聞く限り、天国は論外だ。エッチなことというのは割とどうでもいいのだが、何もすることが無いというのは地獄よりも地獄なのではなかろうか・・・
　赤ん坊からやり直すというのも面倒なことではある。それなら異世界転生をしてそこで魔王討伐とはいかなくても、それなりの生活を送れればいいのではなかろうか？
「分かりました、異世界へ行って魔王を討伐して来ます！」
「・・・ふぁ～あ・・・あれ？なんか言った？」
　この野郎！何で人が真面目に考え語としてるときにうたた寝なんてしてるんだよ!?この人って女神？なんだよな？
「いや、異世界に行こうかと・・・」
「あらそう？じゃあ転生者の特典として自分が望むものをなんでも一つ持って行けるんだけど、それを早めに選んでね？」
「・・・今何て？」
「はぁ!?人の話はちゃんと聞きなさいよ！転生者の特典としてなんでも一つ持って行けるから、早く持って行きたいものを言えって言ってんの！」
「・・・・・・」
　なんなんだ一体この自称女神は。さっきまでうたた寝してたくせ

にいざもう一回言ってくれって言ったら切れるとか、頭おかしいのではなかろうか・・・いや突っ込んだら負けだ。今はとにかく転生特典たるものを決めよう。
「なんでもいいんですか!?ゲームとかの武器でも何でも?」
「なんでもいいって言ってるでしょ?早く選んでくれない?次の転生者とか待ってるんだから」
いい加減切れてもいいのではないだろうか?流石にめんどくさがりすぐだろこの女神。
とはいえ何でもいいのか。俺は生前やってたゲームの武器でも構わないというのなら、武器はこれ一択だ。
「では『神剣ラグネル』を転生特典としてください」
神剣ラグネル。ファイアーエムブレム蒼炎の軌跡、暁の女神の主人公であるアイクの専用武器。剣でありながら間接攻撃を行え、自分の守備を伸ばしてくれる神器である。一度使ってみたいと思っていたが。まさかここでそれを使えるなどとは夢にも思わなかった!
「はいはい、じゃあそれを渡すから。・・・んん、では相馬政宗さん、数多の数の勇者候補から、あなたが魔王を討伐することを心より祈っています。では頑張ってください!」
最後に女神らしいことをして、自称女神アクアは俺を異世界に連れて行った。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「ここが異世界か・・・あれ?ここからどうすればいいんだ?」
あの女神口タラなさすぎ、というか説明不足過ぎないか?異世界に連れてこられてまず最初に何をしたらいいかとか全くわからんぞ・・・
いや、落ち着け、こういう時は最初はギルドに行くべきだ。そう考えたところである異変に気付く。
「・・・動けない・・・」
背負ったラグネルが重すぎて動けない。全く動けないということは無いのだが、重すぎて動きづらいことこの上ない。
何とかしてラグネルを背負ったままギルドらしきところまでたどり着きそこにいた荒くれ者のおじさんに冒険者になるにはどうすれ

ばいいのかを尋ねる。するとギルドカウンターで冒険者登録というものをしなければならないらしく、それにはこの世界のお金、エリスというらしいのだが千エリス必要なのだそうだ。

ここで目下三つ問題が発生した。

一つ目は金が無い。冒険者手数料どころか一文無しである。どこで寝泊まりをすればいいのか皆目見当もつかない。

二つ目はラグネルが重すぎる。移動も碌に行えないのでは戦闘なんてもってのほかだ。まずはラグネルを自由に振れるように、体を鍛えつつお金を貯めていかなければならなさそうだ。

三つめは剣術なんてものを俺は碌すっぽ知らない。今までファイアーエムブレムシリーズはやってきたがあんなの所詮ゲームの中の動き。自分で再現できるはずもなければ剣の経験なんて、学校の剣道の授業くらい、それも真面目にやっていなかったのでよく覚えていない。

「前途多難すぎやしませんかね？」

ため息をつかざるを得ない状況だったが金が無いならバイトというのはどうやらこの世界でも共通のものらしい。とりあえず今日は野宿にするとして、土木業の求人があったのでそれをやりつつ手数料を稼ぎつつ、体を鍛えながら剣を振っていくこととしようかね。

一話

俺は一体この二か月間何をしていたのだろうか・・・

異世界に転生してきて早二ヶ月が経過してしまった。いまだに俺は冒険者登録申請を済ましていなかったりする。今まで何をしていたかって？ずっと土木業のバイトしてたんだよ畜生！

それもこれもラグネルが悪い。ラグネルの公式での重さはt単位。異世界転生によって軽くはなっているものの、両手剣ということもありやはりそれでも重すぎる。前世で全く鍛えていなかったのがあだになった・・・これをエタルドとの二刀流で振り回していたオルティナさんはどれだけ脳筋だったのだろうか。まぁこんな異世界転生なんて予期できるわけじゃないから仕方がないんだけどね・・・

この二か月間はずっと土木業のバイトで金を稼ぎつつ、体を鍛えていた。おかげで少しお金には余裕があるし、ラグネルに振り回されるということもなくなっていはいる。それでもラグネルを地面に叩きつけようものなら、ラグネルから衝撃波が出てきて大惨事になるであろうことを予期して、いまだに剣の素振りは武器屋で格安で手に入れた失敗作の両手剣なのだが・・・そうしてお金と防具が揃ったところでいよいよ冒険者登録をしようということにしたのだ！いやホント、今まで何してたんだろうね・・・

冒険者手数料の千エリスを持ってギルドにやってきた。二か月前は冒険者手数料千エリスが無いからって門前払いされてしまったが今回は違う。そりゃあ千エリス程度、土木業のバイトですぐに稼げる金額だ。

「すいません、冒険者になりたいんですけど」

「ようこそギルドへ、ではここに必要事項を記入して水晶へ手をかざしてください」

「分かりました」

きっと冒険者カードだろう。そこに名前、性別、特徴などを記入していくのだがここでは割愛。俺の特徴なんてここで書いても誰得だよって話だ・・・自分で言ってて悲しくなってきた。そうして記入し

た後に水晶へと手をかざす
「ええっと・・・このパラメーターは一体・・・？」
「あれ？なんかやらかしましたか？」
「い、いえ！体力、力、器用さ、耐久力はかなり高いですね。特に耐久力には目を見張るものがあるのですが、魔力、幸運、魔法耐久力は低めですね。ここまで耐久力と魔法耐久に差が有るのは珍しいんですが・・・知力は平均位ですね。かなり強い部類には入ると思います！」
「はぁ・・・」
　なんか暁の女神のアイクみたいなパラメーターになってますな。幸運が低いのは自前だからどうしようもないが魔防低いのはやっぱり暁の女神のアイクっぽいな。別に転生特典でアイクのパラメーターは求めてなかったんだが、まぁ偶然だろう。
「このパラメーターだと魔法職は無理ですが前衛職のソードマスター、クルセイダーなどがお勧めですが・・・あれ？」
「あの、今度は何なんですか？」
「いや、見たことのない兵種がありまして・・・ヴァンガード？」
「・・・はい？」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

　とりあえず職業はヴァンガードにしてもらったが、一体何なんだろうか？ヴァンガードは暁の女神のアイクの最上級職、奥義は天空で斧も装備できる。まぁ斧なんて漆黒戦の時のハンマーを使うか使わないか程度なのだが、今はそんなことは置いておこう。
　なぜヴァンガードの兵種があるのだろうか？しかもヴァンガードにした時点でスキルの欄に天空と見切りが現れてしまってる。これは本格的にアイクそのもののパラメーターになりつつあるのだが、一体どういうことだ？俺が特典としてもらったものは確かにラグネル、アイクの専用武器だがアイクそのもののパラメーターなんて特典としては求めていない。
　まぁ別に弱い兵種ではない。寧ろ歴代最強主人公の兵種なのだからここは素直に喜べるところだ。なんかスキルの取り方も他の冒険者とは異なるみたいなのだが、そこもやはり暁の女神の仕様なのだろ

うか?スキルキャパシティせめて８０は欲しいところだが、それは今後考えていけばいいだろう。

それよりもやっと冒険者になれたんだから、念願のクエストを受けてみよう!最初は試し切りも兼ねて、ジャイアントトードとやらに行ってみることにする。他の冒険者の話を盗み聞ぎしたところ、これは初心者冒険者が最初に狩る美味しいクエストというやつらしい。とりあえず受注して一人で行ってみるか・・・別に友達とかがいないわけじゃない。ボッチ最高とか言うつもりもないのだが、転生者がいきなり強い奴にジャイアントトードという初心者モンスターを一緒に買ってもらうのはどうかと思っただけで、別に友達がいないわけじゃないんだからな!!

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

アクセルの町を出て平原を歩いていると、ギルドで聞いていたジャイアントトードらしきモンスターが現れた・・・いやいやいや、デカすぎやしませんかね?これ本当に初心者モンスター?最初はド○クエのスライムとか想像してたんだが、一体この世界は何なのだろうか・・・世知辛すぎやしませんかね?

とりあえずラグネルを抜いて構える。二か月普通の両手剣で素振りをしていたから少しはまともに構えられる、と思っていたがそこはやはり原作ではｔ単位の剣だ。やっぱり重いな。まぁ剣に振り回されたりはしない程度には鍛えられている筈なので、そこは自分を信用するしかない。

飲み込まれないように距離を取りつつ、ラグネルを上段から一気に地面へと叩きつける。すると剣からは衝撃波が出てきてカエルを真っ二つに切り裂いた。

・・・ラグネルつええーーーーーーーー!!!!えッ!?こんなに強いのこの武器!?確かに初心者モンスターとはいえいきなり真っ二つにできる程なのか!?こんなことならもっと早く冒険者になって手っ取り早く稼げばよかったよ!

そんなことを考えていたらそれなりに近くで大爆発が起きた。いったい何なんだとその爆発がした方向へ向かってみると、そこには

巨大なクレーターが出来上がっており、カエルの口からは誰かの足がはみ出していた。

二話

これは一体どういうことだ・・・

カエルを狩っていたらなんか爆音が聞こえたからその方向に来てみれば巨大なクレーターが出来上がっていて、その近くで二匹のカエルの口から恐らく人であろう足が出ている・・・いやまぁ、どういう状況かは分かっていはいるのだが、どうしてこうなったのかという疑問が後を絶たない。

俺は俺に関係のない人間がどこでどのように死のうがまるで気にしない質なんだが、目の前で死なれるかもしれない状況っていうのはどうにも寝覚めが悪い。ここは助けるべきなのだろうと判断し、捕食中のカエルの一匹の照準を合わせて、上段の構えからラグネルを地面に叩きつける。正面から切ると捕食中の人まで切りかねないので、念のため側面からだ。

先ほどと同じようにカエルが真っ二つになり捕食していた者を吐き出した。中から出てきたのは魔法使いのような帽子をかぶったした少女だった。

「おい、大丈夫か？」

「・・・うぅ・・・」

カエルくさい？かどうかは知らんがとりあえずくさい事を除けば、呼吸してるし問題ないだろう。

もう一匹の方を殺そうとしたところでカエルに飲み込まれていたパーティーのメンバーであろう、ジャージの少年がもう一匹のカエルを討伐していた

「・・・ジャージ？」

この世界にジャージの人間を見たことがあっただろうか。いや、ひょっとしたらいるのかもしれないが、少なくとも俺は見たことが無い。

ひょっとして転生者かと思ったのだが、転生特典持ちのチート持ちがこのような初心者モンスターに苦戦することなどあるのだろうか。

そんなことを考えていたら、ジャージの少年が声をかけてきた。

「悪い、助かった！」
「いや、気にするな。偶然通りかかっただけだ。お前その格好って、転生者か？」
「転生者かどうかわかるってことは、お前も転生者か？俺はカズマ、佐藤和真。お前は？」
「マサムネ、相馬政宗だ。転生特典はこの剣。神剣ラグネルだ。お前も転生者なら特典あるだろう？一体何選んだんだよ？」
「これ」
　そう言ってうずくまって泣いている水色の髪をした少女を指す
・・・水色の髪・・・それにこの声って
「なぁカズマ、これって、もしかして女神か？」
　そう尋ねると、頷きたくなさそうに首を縦に振る。しかもこの女神、知力がかなり低いらしくカズマはもはや使えないのではと考えているらしい。
　とりあえず女神がいるのならちょうどいいと思い、俺の職業のことについて聞こうとする。だが今は安全確保が先決だろう。遠くにカエルがいたので一応カズマに断りを入れてカエルを狩りに行って、俺の冒険者としての初めてのクエストが終わった
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
　とりあえずアクセルの街に帰ろうとしたのだが、カズマたちが一緒に行動していいか尋ねてきたので好きにしろと言っておく。先ほどのカエル方吐き出された少女は何故か動けない状態らしく、カズマがカエルくさいのを我慢しながら背負っていた。
「なぁ、カズマとアクアの名前は分かったんだが、お前の名前は何なんだ？一応お前を助けたのは俺だろう？礼として、名前くらい教えてくれ」
　そう言ってカズマが背負っている少女に尋ねたのだが
「なんという恩着せがましい良い方なのでしょう・・・ですが尋ねられたからには名乗らないといけませんね。我が名はめぐみん！アークウィザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操るもの！」
「・・・・・・」

は？いきなり何言ってるんだこいつ。あれか中二病かとか、爆裂魔法を操るとか言っておきながら一発撃っただけで動けなくなるなよとか言いたいことはあるのだが、今一番言いたいことを言わせてもらおう。
「冷やかしてんのか？」
「ち、ちがわい・・・！どうしてそこでカズマと同じ反応をするんですか!?」
え、同じ反応してたの？ってことはその名乗り聞いたらみんなが同じこと思うんじゃなかろうか？
「あんまり馬鹿にするのは良くないぞ、なんかこいつは紅魔族っていう知力と魔力が高いらしい、優秀な魔法使いが多い種族らしいからな」
「らしいとは何ですか、らしいとは!?」
「そりゃあどっかの誰かさんみたいに、一発魔法打っただけで動けなくなるような種族が本当に優秀かどうかなんてわからないだろ？」
「おい、そのどっかの誰かさんとはだれなのか聞いてやろうじゃないか」
そう言って背負ってくれてるカズマの首を絞めるめぐみん。なかなか握力が強く振りほどけないらしいが、やはり魔力が足りないらしく数分で振りほどけたらしい。
「おいめぐみん、これからはあの爆裂魔法、緊急時以外禁止な。それ以外の魔法でどうにかしてくれ」
どうやらパーティー内での会議になっているらしく俺はその場を去ろうとしたのだが、カズマが俺の服をつかんで逃がしてくれない。この問題児だらけのパーティーで一人にしてほしくないのだろうか。
「使えません」
「「は？」」
俺とカズマとアクアの声が重なる。俺はその話に一切口出しする気はなかったのだが、あれだけの魔法を使えるのに他の魔法を使えないということはどういうことだろうか？ＲＰＧとかＦＥでもそうだが、最初は弱い威力の魔法から使っていって、レベルが上がると威力

が高い魔法を習得できるものではないのだろうか？まさかあの爆裂魔法とやらがこの世界では一番いろくの低い魔法なのか、それともこの世界では魔法の習得の仕方が俺の知ってるものとは異なるのだろうか？・・・できれば後者であってほしい。

「爆裂魔法が使えるってことは他の魔法も使えるんじゃないの？」

アクアがそう尋ねていた。

「確かに他の魔法も習得は可能です。ですが駄目なのです！私は爆裂魔法しか愛せない！たとえ一日一発が限度でも、たとえ魔法を打った後に倒れて動けなくなったとしても。私は爆裂魔法を使うためだけに、アークウィザードの道を選んだのですから!!」

・・これはあれだ、ダメな奴だ。何がダメって頭がダメな奴だ。本当に知力高いのん？位置に一発が限度で打った後は動けなくなる魔法って、パーティーメンバー必須じゃないですかー、しかもその魔法に巻き込まれる危険性があって、一発撃った後は完全にお荷物じゃないですかー。

こいつあれだな、今までパーティー組んでもらってはいたけど、あまりの使えなさに捨てられた口だな。

カズマもどうやら同じ結論に至ったようでギルドで報酬を分けた後に別れようとしているらしい。しかし必死で抵抗するめぐみんを振りほどけなくて、しかもカエルの粘液どろどろの状態の少女を捨てようとしているカズマを、果たして他の人はどう見るだろうか？

答えは簡単だ。『あの男サイテー』である。一緒にいるとこちらまで風評被害を受けかねないので、少し離れたところから見守っている。別に見守る必要は無いのだが、なんか危なっかしくて目を離せないのだ。めぐみんの必死の抵抗の成果、なのかどうかは分からないがめぐみんはカズマのパーティーに入ることになったらしい。

「話は終わったか？それじゃあまたどこかでさようなら」

俺はこれ以上巻き込まれたくないのでカズマたちから逃げようとしたのだが、カズマに引き留められる。

「なぁおい、ちょっと待ってくれ。お前もうちのパーティーに入ってくれないか？」

「・・・・・・は？」
　こいつは何を言ってるのん？今までの一部始終全部見せられてるのに、俺が素直に首を縦に振ると思ってるのん？でも、こいつらが危なっかしくて目を離せないような連中なのは事実だけど、こいつのパーティーに入ることによって俺にもたらされる利益ってなんだ？でもここで断ると、これ以降パーティーに誘ってくれる人が現れるとは限らない・・・
「少し考えさせてくれ」
　そう保留するのが精いっぱいだった。
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
　とりあえずギルドに行って今日のクエストの報告と報酬を受け取って、宿屋へと向かう。二か月のバイト代と今日の報酬のおかげで数日宿屋で過ごすことができる程度には、お金に余裕があるのだ。
　今日のことを振り返ってみると、やっぱりカズマたちとあってからの事の方が印象に強い。
　初めて受けたクエストよりも、カズマたちを助けたからのことの方が鮮明に思い出せる。
　とりあえずあいつらとパーティーを組むことによるメリットだ。カズマのステータスは幸運特化の知力がそこそこ、まぁ悪知恵がかなり働くタイプなのだろう。ＦＥにおける幸運は正直死にステだとさえ思うのだが、この世界における幸運のステは意外と重要なのかもしれない。職業である冒険者はすべての職業のスキルを覚えられるらしいし、あいつはスキルの取り方を間違えるようなやつじゃなさそうでもある。
　女神アクア。プリーストの上級職であるアークプリースト、女神の力は失われてるらしいが、浄化魔法、支援魔法、回復魔法はかなり得意らしい。だが知力が圧倒的に低い、馬鹿な行動をとることが多く学習能力もかなり低いそうだ。だがあいつは蘇生魔法まで使えるらしい。死ぬ気はさらさらないが、もし死んだときにあいつが必要になってくるかもしれない。
　めぐみん。一日一回の爆裂魔法の使い手。使いどころさえ間違え

なければあいつのあの魔法はかなり有用なものだろう。あの広範囲高威力魔法は使いどころさえ間違えなければの一言に尽きるが、パーティー最高火力になるのは間違いない。あいつを背負うのは俺以外にやらせればいいだけの話だしな。

・・・この時点ですでにかなり前向きになっている。やはり一番の理由は放っておけない、のかもしれない。俺は本来こんな性格ではないのだが、あいつらといるのも悪くなさそうだ。明日にはもう一人くらいメンバーが増えてるかもしれないな。

とりあえず明日、カズマたちにパーティーに入れてもらおう。あいつらといると、退屈しなさそうだ。

三話

一体どうしてこうなった・・・

そこには金髪碧眼の女性と、銀髪でまたを押さえてうずくまって泣いている恐らく少女と、白いパンツを握り住めているジャージを着た男の姿があった。

ことは数分前に遡る。昨日のパーティーについて話をしようと、カズマを探してギルドに寄った。アクアは宴会芸をしており、めぐみんは食事をとっていたため、カズマがどこにいるのかめぐみんに尋ねることにしたのだ。

「おはよう、めぐみん。なぁカズマどこにいるか知らないか？」

「おはようございます。カズマなら先ほどスキルを教えてもらうとか言って出ていきましたよ。すぐ近くにいるのではないでしょうか？」

「そうか、悪い。助かった」

そう言って俺は席を立ちギルドの周辺を少し歩いていた。ギルドの路地裏で何やら話し声が聞こえたので、裏へと回ってみたところ、冒頭の惨状が目に入ったのだ。

・・・カズマも問題児なのか？やっぱパーティー断りたい・・・

だがここで突っ立っていても何も起こらずに時間の浪費をしてしまうので、一応周りに人がいないことを確かめてから、カズマに話しかける。路地裏でパンツ握りしめている男と関係者などとは思われたくないのだ。

「よ、よぉカズマ・・・これは一体・・・？」

「マサムネ!?ち、違うんだ！」

「まだ何も聞いてねえよ。違うって何が違うんだよ。これどう見ても事後じゃねえか・・・」

「だから誤解なんだって!!」

「・・・グスッ、私が彼にスキルを教えてあげるって言って、窃盗のスキルを教えてあげたら・・・パンツ盗られた・・・しかも振り回して喜んで、返してくれなくて・・・いくら出したら返してくれるって聞いても、自分のパンツの値段は自分で決めろって・・・！」

有罪。これはこいつが悪い。流石に弱肉強食のこの世界でも、性犯罪はいかんよカズマ、いやクズマ君。しかも金髪の人は頬を染めてハァハァ言ってる。なんかここから一刻も早く離れたい。

「とりあえず返してやれよ。俺はお前に話が合ってお前を探してたんだからな。まさか朝一番にパンツ握りしめてるお前を見ることになるとは思わなかったけどな」

そう言って俺はこの場を離れる。この場にいるとなんか俺まで関係者に見られるかもしれないと思うと、早く離れるのが賢明であろう。

それにしてもスキルか・・・俺のスキルって他の冒険者たちとはシステムが異なるらしいんだよな。スキルキャパシティ７０か・・・天空で３０、見切りで２０の計５０か・・・あと２０しかないな。しかも新しいスキルの取得方法が分からな・・・ん？

これってベオクが取得可能なスキルか？これを選択することでスキルが取得できそうだな。何この職業、チート過ぎやしませんかね？

そう思いながらもなんとなく便利そうなスキル『俊足』を取っておくことにする。移動が速くなるのは便利だ。

そういえば天空ってどうやってやるのん？

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

とりあえず俺はギルドに戻る。何かやることがあるわけではないが、一応カズマを待っておいたほうがいいだろう。

少したってカズマと金髪美人と泣いている銀髪少女が一緒にギルドに戻ってきた。

「なんで彼女は泣いているんですか？」

状況を知らないめぐみんがカズマたちに訊ねた

「窃盗のスキル使って下着取られて・・・でも返してくれなくて・・・いくら出したら返してくれるか聞いたら、自運のパンツの値段は自分で決めなって・・・有り金全部むしり取られて・・・」

「おおい、やめろよ！ここにいる女性たちの目が・・・」

・・・おい、舌出してるんじゃねえよ。仕組んでたのか。

「ということはスキルを覚えたのですね」

若干引きながらだったがカズマと話してあげるめぐみんは相当優しいと思う。
「ふっ、見てろよ・・・『スティール』！」
そう言ってめぐみんに向かって窃盗スキルを使った。スティールを使われためぐみんは頬を染めながらうつむいていった。・・・まさか・・・
「ん、これは・・・」
カズマさんカズマさん？君これから女性に向かってスティール使うの辞めよっか？ほぼ確実にパンツ盗むぞお前
「なんですか、レベルが上がって冒険者から変態へジョブチェンジしたんですか？あとスース―するのでパンツ返してください」
カズマを見る女性冒険者たちの目がゴミを見るようになっていた。いや仕方ないだろこれ、完全に自業自得だぞこれ。
「公衆の面前でいたいけな少女から下着を盗むなんて、真の鬼畜だ許せない！ぜひ私をパーティーに！」
「お断りします」
「ッ!!」
なるほどこの人冒険者でパーティーメンバー候補なのね。性癖がやばそうだけど、なんか剣持ってるし前衛職っぽいな。
「カズマ、この人は？」
「あぁ、ダクネスっていうクルセイダー、騎士でちょっと、いや大分頭が残念な人らしい」
「つまり前衛職か、よかったな前衛職が入ってくれて」
「いやいやいや、全く攻撃が当たらないらしいぞ!?」
それって冒険者としてどうなのん？モンスターに攻撃出来なくてレベルって上がるのん？
『緊急、緊急！冒険者の皆様は装備を整えて、町の正門に集合して下さい！』
は？緊急？何があった？とりあえずカズマに言いたいことだけ言って緊急クエストとやらに行ってみるとするか。
「そういやカズマよ」

「あ？なんだ？」
「お前のパーティー、入ってやるよ」
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
緊急クエストとやらに呼ばれて正門にたどり着いた。何故か水の入った大量の桶が大量に置いてある
「なぁ、今から何やるんだ？」
それは俺も気になる。
「そう言えばあんたたちはこの世界に来て日が浅かったわね。今からやるのはね、キャベツの収穫よ！」
・・・は？キャベツ？アクアは何言ってるのだろうか？キャベツの収穫なら畑でやるもんだろ？何で正門に呼び出されるんだよ？そう思っているとまだ話の途中だったらしく、解説の続きが始まった。
「この世界のキャベツはね、飛ぶの。収穫の時期になると飛んで、そして人知れず朽ち果ててしまうの。それだったら私たちが収穫をして、おいしくいただこうってわけ！」
いろいろ突っ込みたい。なぜ飛ぶ？キャベツだよ？野菜のキャベツだよ？この世界って日本からの転生者に不親切すぎませんかね？
そんなこんなしているうちに遠くから緑色の大群らしきものが飛んできた。
『今年のキャベツは出来が良く、一玉一万エリスです！みなさん、頑張って収穫して下さい！』
≪緊急クエスト：キャベツを収穫せよ！≫

四話

まずい、キャベツ如きにこんなに苦戦するとは思わなかった・・・
まずキャベツが意外と攻撃力が高い。守備は高いからダメージ自体は少ないのだが、いかんせん体当たりしてきた時の衝撃は思ってたよりもすさまじいものがある。そんなに小さい普通のキャベツのどこからそんな力が湧くんだよ、と思う程度には。
そして意外とすばしっこい。先ほどてきとうにつけたスキル『俊足』のおかげで動きにはついていける。だがラグネルが重く攻撃をしても躱される。先ほどから何度か攻撃しているのだが収穫できたキャベツは恐らく五玉程度。稼ぎは少ない。
剣がもう少し軽ければもっと簡単に収穫できるのだろう。このクエスト終わった後、報酬で普通の軽い剣も買っておこうと思う。さてどうしたものかと思い周りを見渡してみると、アクアがキャベツに負傷させられた冒険者の回復をしたり、めぐみんが爆裂魔法の準備に取り掛かっていたり、金髪美人とカズマが何か話し込んでいる。
金髪美人が剣を抜いてキャベツに向かって特攻していったが、上段切り、横薙ぎ、上段からの切り返しなどをしてキャベツに挑んでいるが、かすりもしない・・・あれ？あのひと攻撃全く当たらないのん？カズマの方へ向かって話を聞いてみることにする。
「なぁカズマ、あの金髪の人って、もしかして攻撃が全く当たらなかったりするのか？」
「あぁ・・・自分で言っていたがこれほどとは・・・」
「マジか・・・あの人もパーティー入り志願してるんだろ？どうするんだよ？」
「断りたいけど、あの二人に知られたからにはおそらく不可能だろう。もう諦めたよ・・・」
「まぁ俺は構わないんだが。ところでカズマよ、お前このクエストでその剣使おうと思っているか？」
「ん？これか？恐らく使わないが、どうしてだ？」

「いやなに、この剣が重すぎてキャベツに攻撃が当たり辛くてね・・・その剣ならこれよりも振りやすいだろうからこのクエストの間だけ貸してもらいたいんだが、いいか？」
「そういうことなら別に構わねえよ。ほれ。そのかわり、あとで何か奢れよ」
「わかったよ・・・サンキュー」
　そう言ってカズマから剣を受け取り、キャベツに向かって再び歩き出す。
（ああいいねこれ、この敵をバッタあったとなぎ倒せる感じ！いいねえ！）
　カズマの剣を受け取ってからの俺の収穫スピードは格段に上がった。もともとキャベツの動きにはついていけてた、あとは剣が重くて当たらないことが問題だったが、それはカズマの剣がラグネルよりも軽いため問題なく当たるようになった。さらにキャベツのＨＰが低いことと俺の力が高いことが幸いし、キャベツに一撃入れるだけで収穫できるのだ。
　なんだろう・・・この特典を使いこなせていない感じ・・・なんか悲しくなってくる・・・

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

　緊急クエストのキャベツ収穫が終わり、ギルドで夕食を食べている。メニューは今日収穫したばかりのキャベツを使ったフルコースだった。
「おかしい、なんでキャベツの塩炒めがこんなにうまいんだ・・・」
　なんかカズマが隣で文句を言いながらも口に運んでるところを見るとおいしいんだろうな。俺も食べるとしよう。
「あなた流石クルセイダーね！あのキャベツたちもあなたの固さには攻めあぐねていたもの！」
「いや、私はただ固いだけが取り柄みたいなものだから。それよりもアクアとめぐみんの二人もすごかったではないか！アクアはけが人を治療して回ったり、士気を高めたりと。めぐみんの爆裂魔法、あれは・・・凄まじかったぞ・・・」

なぁんで頬を染めながらハァハァしてそんなこと言ってるんですかね？
「それにマサムネと言ったか？お前も金色の剣から普通の剣に変えてからは活躍していたな！あれは一体どういうことだ？」
「あれは俺の剣が重すぎるんだよ。重すぎてキャベツの動きに剣がついていけなかったんだよ。だから剣を軽くしてキャベツの動きに合わせていただけさ。」
その後も今日のクエストの成果を互いが互いに褒めあったり、ただの雑談をしながら時は過ぎていく。
「では改めて、私はダクネス。クルセイダーを生業としている。恥ずかしながら攻撃は全く当たらないのだが、皆の盾としてこき使ってくれ。何なら敵の真っただ中に放置してくれても構わない！」
ダクネスが自己紹介をした後にみんながこっちを見てきた。つまり俺も自己紹介しろと・・・
「ええっと、マサムネ。そうやって呼んでくれ。兵種はヴァンガード・・・俺もよく分からん兵種だが、まぁよろしく頼む。この剣のおかげで中距離から近距離までなら俺が相手を出来る。だからその範囲なら俺が何とかして敵を捌こう」
そう言って俺のパーティー入りが正式に決定した。
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
この間の緊急クエストの報酬が５０万エリスだった。なんか偶にレタスも混ざっていたらしいが俺の場合キャベツもそれなりにあったようだ。さらにカズマに剣を借りてからの収穫がかなり多かったようで、それなりの賃金を得ることができた。
この報酬を使って俺は剣を新しく購入することにした。ラグネルだけだと素早い敵に対応できない場合があるとキャベツに教えられたためだ。・・・キャベツに教えられたって言っててなんか悲しくなってきた・・・
俺は現在鍛冶屋に来ている。新しい剣を作ってもらうか、そこで売ってる剣を購入するためである。
店を物色しているとどこかで見たことがあるような剣が目に入っ

た。
「なぁ店員さん、この剣て一体・・・？」
「あぁこの剣か。この剣は作ったわいいんだが使える奴が少なくてな。なんていうか重くて振り回しづらいらしい。銘は『アロンダイト』っていうんだが」
アロンダイトォ!?暁の女神のアイクの初期装備の剣じゃないか！別に特殊な能力とか特攻とかは何もないんだが、普通の剣に比べて威力は高めだったな。
「店員さん、この剣振ってみていいか？」
「別に構わねえが、兄ちゃん振れるのか？」
「恐らく大丈夫だ。普段はこれより重い剣振ってるからな」
そう言ってアロンダイトを手に取って何回か素振りをしてみる。この剣が何故かこの店で一番しっくりくる気がしていたのだが、予想以上にしっくり来ている。
俺がアロンダイトを振っていることに店員が目を見開いている。この剣、ラグネルに比べれば軽すぎる気がするが、自由に振りまわす運にはこの剣が一番いいだろう。
「店員さん！この剣俺に売ってくれないか!?
「おぉ！いいぞ！代金は２０万エリスだ！」
そう言って俺は財布から２０万エリスを出した。なぜこの世界にアロンダイトがあるのかは不明だが、かなりいい買い物ができた！

五話

・・・どうしてこうなった

いきなり緊急としてアクセルの町の正門に集められた冒険者たち。そしてそこでおれたち冒険者を待っていたのはデュラハンだった。

アクア以外はキャベツの報酬でそれなりに稼げたので今はクエストには挑まずに、全員がそれぞれ自由に行動している。めぐみんは報酬で杖を新調したらしく、ダクネスはキャベツの猛攻によって壊れた鎧を新調したらしい。ちなみにそのダクネスは筋トレとか言って実家に帰っている。カズマはジャージ姿から冒険者っぽい見た目の装備に代わっていた。アクアは稼ぎが少なかったからか、アルバイトに精を出していた。

俺は特にやることもないが力のパラメーターを上げて、ラグネルを少しでも自由に扱えるようにということと、実戦経験を積むためにそれなりに難しいクエストを受けていた。というか難易度の高いクエストしか残っていなかった。どうやらこの付近のは以上に魔王軍幹部が住み着いてそれに怯えた弱いモンスターが隠れてしまったらしい。

そんなことをしつつ適当に一日一日を潰していたところ、緊急クエストということで呼び出された。

そうして冒頭の部分に戻る。あいつのせいで雑魚モンスターが隠れてるのか?

「俺は魔王軍幹部のベルディア。最近この町の近くのは以上に引っ越してきたんだが・・・誰だ!?毎日毎日、ポンポンポンポンポンポンポンポン爆裂魔法を放っている、頭のおかしい奴は!?」

どうやらかなりお怒りのようだ・・・というかこの町で爆裂魔法って言ったら、うちのアークウィザードしかいなくないか?ここに集まってる冒険者全員が同じ考えに至ったのか、全員がめぐみんのことを見ていたが、当の犯人候補筆頭のめぐみんは他のパーティーのウィザードを見ていた。

「そんな・・・私じゃありません!それに爆裂魔法なんて使えませんし・・・」
いやちゃんとわかってるから名前は知らないウィザードさん。若干泣きそうになって可哀想になってきた辺りでめぐみんが覚悟を決めたのか、前に出ていつもの名乗りを上げる。
「我が名はめぐみん!アークウィザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操るもの!」
「・・・茶化してるのか?」
「ち、違わい!私が毎日爆裂魔法を放っていたのは・・・そう!魔王軍幹部であるあなたを誘き出すための罠だったのですよ!」
嘘つけ!あそこに魔王軍幹部が住んでると分かってて喧嘩売るなよ!この町で魔王軍幹部と戦える奴なんていねえだろ!
「まぁ過ぎてしまったことは良い・・・今後爆裂魔法を打ち込むことはやめろよ」
「嫌です。紅魔族は一日に一度爆裂魔法を放たないと死んでしまうのです」
「そんなこと聞いたことねえぞ!?だが、辞める気が無いというのならいいだろう。何時に死の宣告を、お前は一週間後に死ぬだろう」
あれは呪いか!?まずい!
そう思って駆けだそうとしたらすでにダクネスがその呪いをめぐみんの変わりに受けていた。
「ダクネス!?大丈夫か!?」
「あぁ・・・なんともないようだが・・・」
「その呪いは今は何ともないが、その呪いを受けたものは一週間後に死ぬ。」
死ぬ・・・?ダクネスが死ぬ・・・?仲間が死ぬのか・・・?
そう思った瞬間、俺はラグネルを抜いて地面に叩きつけていた。
「うぉっと」
衝撃波は軽々と回避されてしまったが隙を作ることはできた。その隙にラグネルをしまい、アロンダイトを抜いてデュラハンに切りかかる。

デュラハンも慌てて剣を抜いて対応してくる。流石はもと騎士で剣の達人だ。ちょっとした隙だと今の実力では攻撃を当てられる気がしない。
それでもここで引くわけにはいかない！
「ふっ！」
いったん後ろに飛んで距離を取り足元の砂を拾って、デュラハンが持ってる頭めがけて投擲をする。デュラハンはそれを回避するがその隙をついて足元を切り払う。
「くっ・・・！」
それを飛んで回避するデュラハンだが空中に飛ぶのは愚策だ。地上よりも動きが制限される。
「そこだ！」
そこを狙ってラグネルに装備を変えて全力で切りかかる。何とか一撃を与えることはできたが恐らくこれ以上の攻撃は不可能だろう。それくらいこいつと今の俺には実力差が有る。
「ハァハァ・・・」
「くっ・・・貴様、なかなかやるようだな。だが足りん、今の実力では俺には勝てないぞ？」
そんなの分かってる。戦闘経験なんかまったくない日本人だった俺ともと騎士だったこいつが一瞬とはいえ渡り合えたことが奇跡だ。
「今回はそこの小僧に免じて引いてやろう。呪いを解いてほしければ俺の城までくることだな。もっとも俺の所までたどり着けたらの話だがな」
そう言ってデュラハンは帰っていった。瞬間、どっと疲れが襲ってくる。初めての幹部との戦いに緊張の糸が切れたのだろう
「ハァハァ・・・大丈夫か？ダクネス？」
「お前こそ、いきなり戦うなんて、怪我はしてないのか？」
「なんとかな、あいつに反撃されてたらヤバかったかもな・・・」
「ごめんなさい、ダクネス、マサムネ・・・私のせいで・・・」
「いや、めぐみんの所為じゃないさ」
ダクネスはそういうがめぐみんは額面通りには受け取れない。

めぐみんは身をひるがえし先ほどのデュラハンが去っていった方を見据える。
「おい、まさかとは思うが、城に乗り込むわけじゃないだろうな・・・？」
「今回の件はすべて私の所為です・・・私が責任を取るのは当たり前でしょう？それに我が爆裂魔法があればあの程度の敵、どうってことありませんよ」
「・・・待てよ、それを言うなら俺にだって責任はある。毎日お前の爆裂魔法に付き合っておきながら、全く気付けなかったんだからな。それに、お前は魔法一発撃ったら動けなくなるだろ？そんな奴、一人で行かせるわけにはいかないな」
おぉ、カズマが珍しくまともに見える。
「俺も行くぞ。あいつとは決着をつけたいからな。それにお前らだけじゃ戦力的に心許無いだろ？」
「じゃあどうやって攻略していきましょうか？猶予は一週間。私が毎日爆裂魔法を打った後にカズマとマサムネで乗り込むというのはどうでしょうか？」
「それでいいんじゃないか、じゃあ早速――――」
『セイクリッド・ブレイクスペル』
アクアがダクネスに向かって何かの魔法を唱えていた。するとダクネスに先ほどデュラハンに掛けられた呪いが解除された。
「この私に掛かればこの程度の呪い解除するなんて朝飯前よ！」
「「お、おう・・・」」
俺たちのシリアスを返せ！